

## 第3章 無理せず、楽しく、できることを

青森県・スクランブルエッグ

ソウさん



実施日：2019年6月3日 聞き手：杉浦郁子・前川直哉

実施場所：青森県男女共同参画センター・グループ活動室（青森市）

### 【プロフィール】

1978年、青森県弘前市生まれ（インタビュー時40歳）。20代で首都圏や青森市での生活を経験した後、弘前市に戻る。2008年、青森県内での「性の多様性」に関する発信を目的とするサークル、スクランブルエッグを立ち上げる。2018年7月まで代表を務め、現在もスタッフとして活動中。

### 1. スクランブルエッグの活動

現在「スクランブルエッグ」という、青森県と近隣地域で活動しているサークルに関わっています。性的マイノリティについて知ってもらうことが主な活動目的です。

そのために、機関紙『にじたま』を発行してきました。サークルのメンバーが記事を書いたり、企画したりしています。クローゼットの当事者でも発信ができる、啓発と自助を兼ねたもので、年に2、3回のペースで発行してきました。それから、年に2回は、展示をしたり、講座を開催したりして、一般市民に知ってもらえる機会を作っています。

去年（2018年8月）からは、不定期開催ですが、「にじたま会」という交流会を始めました。性的マイノリティの当事者やその家族、「自分は本当に性的マイノリティなのかな」と思っている人や「同じような人と会いたい」と思っている人が交流できる場所を作りたいと考えています。

サークルの参加者は当事者だけではありません。アライの友達や親御さんが一緒に来ることもあります。どんなセクシュアリティやジェンダーの人が多いのかは、厳密には言えませんが、スクランブルエッグの場合は、活動を通していろいろな人に出会って変わっていったり、揺らいだりするクエスチョニングの方、Xジェンダーの方も割と多いと思います。

活動地域は主に青森県内です。ただ、最近では、講師派遣で声をかけていただいて、秋田、岩手ぐらいまで広がっています。

## 2. スクランブルエッグを始めるまで

### ◆弘前でオフ会（2007年ゴールデンウィーク）

2007年の2月頃に東京から弘前に戻ってきたのですが、同じ性的マイノリティの友達が地元になかったので、セクシュアリティのことを話せる人がおらず息苦しくなっていました。それで、弘前市内でオフ会をしました。インターネットで知り合った者同士で実際に会って遊ぼうよ、という企画です。

首都圏にいたときもオフ会に参加したことはあったのですが、それが合コンっぽいノリで、どうもついていけなかった。それで、何回か自分でオフ会を企画したことがあって、その経験があったので、弘前でもやってみようと思立ちました。

当時はまだSNSではなく、掲示板がメインでした。私は、レズビアンの人たちが使っていた掲示板にも出入りしていて、治療前だったこともあって、その掲示板で募集をかけたところ、1回目で10人ぐらい集まりました。レズビアンの交流サイトで募集したので、レズビアンやバイセクシュアル女性がメインで、八戸や秋田からの参加者もいました。

最初のオフ会のときは、一緒に幹事をやると言ってくれた方がいて、会って打ち合わせをしました。掲示板で知り合った方です。初回は、桜のある公園でお花見をすることにしました。夜に飲み会をするオフ会が多いのですが、それだと10代の子が来られない。掲示板でよくコメントを付けている子たちが10代だったし、公園のほうが逆に目立たないんじゃないかと思って、日中にしました。

参加者はほとんどが初対面で、まずは様子をうかがうような感じでした。プライベートの込み入った話は誰もしませんでした。緊張しすぎて飲みすぎてしまう人もいましたが、だいぶ前から自分でイベントをしているという方もいて盛り上げてくれました。

その時は「場所をつくる」という意識はなく、カミングアウトをしなくても話せる相手がほしくて、自分のために始めました。オフ会を続けていこうと思っていたわけでもありません。ただ、それを楽しみにしてくれる人ができたので、何回かオフ会を企画しました。10代の子は、すでに掲示板で会話をしているからか、それほど人見知りもせず、カップルができたりもしたんですね。

でも、街中で集まるのを嫌がる高校生の子もいました。地方は集まれる場所が少ないので、どこに行っても学校の同級生や親に会ってしまう可能性がある。オフ会のときもキョロキョロしているんです。知り合いに会ってしまったときの言い訳を一生懸命考えている子もいたし、気になってずっと周りを見ている子もいました。「カラオケとか限られた空間のほうがいいかな」と考えたりしましたが、どこでやっても知り合いがいるかもしれない。車を出して、少し離れたところにわざわざ行ったりもしました。

### ◆「にじいろ扁平足」の活動に参加

そのオフ会に来てくれたバイセクシュアルの女子高生がいたのですが、しばらくして、学校でいじめに遭っていることを打ち明けてくれたんです。保健室の先生に相談したけれど「担任には言わないほうがいいと思う」と言われていた状況で、「大人は信用できない」と

言っていました。

私はそのとき 20 代後半。その子とは 10 歳ほど年が離れていたのですが、「10 年経ってもこんな状況なんだ」と思いました。青森では「青森国際ショナル LGBT フィルム フェスティバル（映画祭）」もやっているし、「だんだん味方も増えているのかな」「若い世代は変わってきたのかな」と思っていたのですが、実際には学校で「あいつはレズだ」といじめられている。10 年間変わっていないんだとしたら、このまま何もしなければ 10 年後も変わっていないのか、と思ったんです。何も悪いことをしていないのに、その子が嫌がらせを受けていることが、何だかとても悔しかった。

その頃、「性同一性障害」という言葉は、テレビドラマ『金八先生』を通して知られていました。特例法もありました。一方で、同性愛やバイセクシュアルへの偏見は強く、地元で生活しながらオープンに発信するのは難しいと感じていたので、「クローゼットでも発信できるようにしたいな」と考えるようになりました。

オフ会は交流のために開催したクローゼットなものでしたが、その中で知り合った子が嫌な目に遭っている。その子のためにすぐ何かできるわけではないけれど、5 年後、10 年後に同じようなことが起きないように、外側へ向けて何かをしたいと思いました。

それで「青森セクシュアルマイノリティ協会～にじいろ扁平足～」という団体の立ち上げに関わりました（2007 年）。自分以外のメンバーは、当時東京等で活動していた青森出身の方と、県内の方の 2 人でした。県内の実動隊は 2 人で、情報は東京のほうから来る、という状態でした。

#### ◆スクランブルエッグの発足（2008 年 11 月）

ただ、年が明けてから、方向性ややり方の違いから話し合いがまとまらなくなってきたので、私はにじいろ扁平足から抜けることにしました。

そして、自分は違った方向から活動をしていこうと、新たにサークルを立ち上げました（2008 年 11 月 11 日）。にじいろ扁平足として活動していたときに、青森県男女共同参画センターに団体登録ができることを知ったので、会員が増えてきて団体のかたちができるので登録をしました。

サークル名は、私のパートナーが候補を考えてくれました。「スクランブルエッグっておいしそうだし、親しみやすくいいね」という感じで、決めたときは割と適当だったのですが、意味を尋ねられた時は「みんなごちゃまぜでいいよね、という意味です」と説明しています。

映画祭があったので始められた、ということもあります。「少なくとも味方になってくれそうな人はいるぞ」という心強さがあった。何かあったときに力を貸してくれる、味方になってくれる、今で言う「アライ」がいる、ということは考えました。当事者だけだとどうしても怖い。でも、ちょっと力を貸してくれるアライの人がいるのであれば、やれるんじゃないか、と。映画祭とのつながりは、にじいろ扁平足のときにできました。その後、映画祭と一緒に「IDAHO メッセージ展」をやるようになりました。

### 3. スクランブルエッグの歩み

#### ◆機関紙『にじたま』(2009年7月)

発刊は2009年7月です。メンバー同士の対談、イベントの参加報告、性的マイノリティ関係の本や映画、話題になったニュースを紹介するところからスタートしています。

スクランブルエッグの立ち上げは2008年11月になっていますが、スタッフは自分1人で、ホームページをオープンしただけなんです。2009年の3月頃に新しいスタッフが入ってくれて、その友達が参加してくれたり、ぽつりぽつりと問い合わせがきたりというかたちで、徐々に増えてきました。「クローゼットで表に出られないけれど何かやりたい」という気持ちのある人が多かったです。「何かやりたい」という気持ちを形にしたい。機関紙ならクローゼットでも表現できるし、安く作れると考えました。こういうモノ作りが好きだという人もいました。

『にじたま』は、文章を書くのが好きな人に手伝ってもらっています。できる限り、いろいろなメンバーに書いてもらうようにしているのですが、余裕がないときは1人で書いてしまうこともあります。今まさに次の締め切りが来ていて、「やばい、記事が足りない」と慌てて書いているところです(笑)。でも、全部1人でやったことないはず。4コマ漫画もメンバーが描いてくれています。編集長的な仕事も、こういうのを組むのが得意なメンバーにお願いしていて、間に合わないときだけ自分がやります。

#### ◆手の届くところに『にじたま』を

これは「にじいろ扁平足」に関わっていたときから思っていたことなのですが、青森は交通の便が悪いため、10代の子たちは隣の町にも自由に行けません。だから、手に届くところに『にじたま』を置きたい。そうすれば、もしかしたら気づくかもしれないし、置いてくれる施設の人も見てくれるかもしれない。機関紙という紙の媒体を地域の施設に置くというのは、「手の届くところに情報を置く」という目的にかなうことでした。

それから、存在感です。地元の間が確かに作って、施設に持っていつている、というリアリティ。スクランブルエッグが重視していたのは、その点でした。性的マイノリティは、テレビの中の出来事ではなくて、もうとっくに一緒に暮らしているし、ぜんぜん変じゃない、ということを知ってもらいたい。それを知っている人が増えれば、学校でいじめに遭っても、「それは違う」と味方をしてくれるんじゃないかと。そのために始めたサークルですから。作った人もいるし、届けている人もいるという存在感を、自分たち自身を通して伝えたい、と考えていました。

実際に『にじたま』を持参して、施設に設置をお願いしていきました。今は、20カ所ぐらいに設置してもらっています<sup>1</sup>。図書館が多いですね。男女共同参画の施設や、人の目に触れやすそうな図書館に主に依頼しています。

最初は飛び込みでお願いしていったのですが、雰囲気的に入れなかったところ、「ここは

<sup>1</sup> 『にじたま』の主な設置依頼先 <http://gochamazetamago.main.jp/activity/act2/>

無理だ」と思ったところもありました。例えば、地域色が強すぎて入れない。南部地方（青森県東部）のほうに行くとなまりが違うので、津軽から行って津軽弁で話すと「津軽の人がなんでここに来たの?」「わざわざ何を持って来たんだ?」と思われるんじゃないかと不安になったりもしました。小さい町ほど古い施設も多くて、閉鎖的な雰囲気が出ているように感じてしまうんです。

飛び込みでの依頼は、やっぱりしんどかったです。それでも、思いがけず好意的な反応もあったりしましたし、拒否されることはあまりなかったです。ただ、設置してくれているかわからない、持って行っているけど置かれているのを見たことがない、というところはありません。今は、そういうことはなくなってきたと思うのですが……。遠いところに1人で行くのはちょっとつらいので、3人ぐらいで小旅行気分で行っていました。だから折れなかった。「よし! 海軍コロッケ食べて帰ろう」と元気を出しながら、窓口をお願いしていました。

これは他のメンバーの話なのですが、施設で名刺を渡したら、嫌がらせのメールが来たことがありました。名刺を渡した相手は限られているので、大体ここかな、ということはわかります。それを逆手にとって、「こういうことがありましたが、こういうことをなくすために私たちは活動をしています」という手紙を、次に持参したときに渡しました。それ以来、名刺には個人のアドレスではなく、公式のアドレスを載せるようにしました。

#### ◆弘前 IDAHO メッセージ展 (2009年9月)

いろいろとやりたいという若いメンバーが増えてきたので、弘前の土手町商店街でのイベントに参加をして、「弘前 IDAHO メッセージ展」をしました(2009年9月3日)。「カルチュアロード」という、商店街を歩行者天国にして毎年行われている「路上文化祭」です。お店や会社、団体がずらっとテントを並べて、展示や販売をする、けっこう大きなお祭りです。

「出たら面白いんじゃない?」「出たらすごくない?」というノリで、申し込みました。団体の趣旨や展示内容も申込書に書きました。「主催者側がどういうふうに思うのかな?」と不安もあったのですが、「出展可」という連絡が来ました。その後、出展団体への説明会に行った際も緊張しっぱなしでしたが、メンバーでの準備は楽しみながらできていたので、成し遂げたい気持ちのほうが強かったです。

テントは、スクランブルエッグにも参加していた大学生メンバーが立ち上げた性的マイノリティの大学サークル、「弘前大学 SALAD HOUSE」が大学から借りてくれました。かなりの人通りでしたが、テントの中にいれば少し守られている気持ちになります。私自身は、その頃は青森市で働いていたので、弘前市でやるのにそれほど危険を感じませんでした。同級生とのつながりも切れていたもので、「気づかないんじゃない?」くらいの気持ちでいました。

もちろん「当日は出られないから」と言って準備だけ手伝うメンバーもいましたが、「出られないから」と言っておきながら来てしまったメンバーもいました。わいわいやっているので、やっぱり楽しいんでしょうね。

IDAHO メッセージ展に加えて、「セクシュアルマイノリティ (LGBT) という言葉を知っていますか?」「同性愛は変だと思いませんか?」などの質問を書いたボードを置いて、回答をシールで貼ってもらい、ということもしました。メンバーの大学生とアライの友達が、そのボードを首から下げて、通りに出て聞いて回ったのですが、その最中におじいちゃんに怒鳴られる、ということがありました。また、テントはカラフルなので子どもが寄ってくるのですが、お母さんが子どもの手を引っ張って「あそこはダメ」と言うこともありました。その反面、「同性愛もありだべな」と肯定的な反応をしてくれたおばあちゃんもいたし、雨宿りに来てくれた孫連れのおばあちゃんもいました。

イベント開催中は、弘前出身でずっと弘前に住んでいる、弘前で働いているというメンバーはほとんど来ていなかったと思います。やはり地元だと来づらい。「弘前大学 SALAD HOUSE」には、地元の人がいれば、そうでない人もいました。表に出ていきたいという人もいましたが、そうでない人もやっぱり多い。「SALAD HOUSE」はもともと居場所として立ち上げたサークルで、啓発や勉強を目的としていたわけではなかった、と聞いています。確か 2016 年ぐらいで活動を停止してしまったのではないかなと思います。

#### ◆ラジオ・テレビ・新聞

カルチュアロードでは、弘前市のコミュニティ FM「アップルウェーブ」が取材をしていました。チラシを持って行っていったところ、その後に「番組に出ませんか」と声をかけていただきました。地元の人を取り上げて、どういう活動をしているのかを紹介する「津軽いじん館」という番組で、アライのメンバーと一緒に出ました (2009 年 11 月 2 日)。

翌年には、映画祭のつながりでご連絡いただいて、NHK のテレビ番組にも出るようになりました。顔を出しての生出演でした。当時は、青森市にいて、アルバイトの身分で、上司にカミングアウトして勤めていたので、あまり顔を隠していませんでした (NHK 青森放送局「あっぷるワイド」、2010 年 9 月 7 日)。

ただ、表に出て行って発信するのは難しいな、と思います。否定的な反応に出くわすこともありますから。カルチュアロードのときのように、メンバーがアンケートボードを下げて出て行って怒鳴られた、というのは、あってはならないことで、すごく反省したんです。サークルのモットーは「無理せず、楽しく、できることを」なので、怖い思いをするというのは以ての外なんですね。一方で、「特別なものではない」「怖いものでもないよ」と伝えるためには、自分たちが生でやるしかないよね、という部分もある。どれくらい出て行って、どれくらい引っ込むか、難しいところです。

#### ◆活動アレルギー

首都圏にいたときは、市民活動は全くやっていなかったです。何だか押し付けっぽい感じがしてしまって、むしろ嫌いでした。だから、オフ会で出会ったバイセクシュアルの子がいて、ということがなかったら活動はしていなかったですし、「今ここで静かに暮らしているのに、なんでわざわざ」という気持ち、私たちの話を聞きたくないという人の気持ちもわかるんですよ。

自分が活動を始めたときも、オフ会の知り合いから反対されました。「顔を出して表に出ていくんだったら、あなたと一緒に歩けないし、もう一緒にやれなくなる」「あなたのパートナーとか家族にも害が及ぶかもしれないよ」「そういう覚悟をしてるの?」「それでもやるの?」と言われました。自分もそれまでその知り合いと全く同じことを考えていました。でも「それでも自分は悔しいから、やれることをやってみる」と伝えました。

実はサークルを立ち上げる前に、親友に「何かしたいと思うのは、偽善とか独りよがりなんだろうか」という相談をしたことがあります。周囲の反応が気になっていました。でも親友は、「別に偽善でも独りよがりでもいいでしょ」というような返答をしてくれました。その時に、くよくよしていた気持ちが吹っ切れました。自分がしたいと思うこと、いいと思うことを、シンプルにやればいいんだと。自分にとって活動するということは自分のためのものであって、使命でも義務でもないし、誰かのためでもありません。

オフ会にはサークル活動のことを持ち込まないことにしました。聞かれれば答えますけど、オフ会では自分からサークルの話はしない。自分がオフ会やクローゼットの集まりで楽しんでいるときに、活動の話をされると「ああ……」となってしまいうほうだったので。オフ会で、自分からサークルの勧誘というのは基本的にしないですし、オフ会経由でスクランブルエッグの会員になった人はほとんどいないです。

青森には、LGBTに限らず、市民活動アレルギーがあると思います。街頭アクションで声を上げたら、避けていく人が多いですから。自分たちの日常生活にないものに不安を感じるのか、面倒なものに関わりたくないのか、新しいものや見慣れないものを遠巻きに見ます。だから IDAHO メッセージ展だったんですよ。相手が自分のペースで近づけるように、そっと展示するんです。目立つものをバンッと押しだされると、先に心に壁ができてしまって、そこを崩して仲良くなるのがすごくたいへん。でも、自分はその気持ちがわかってしまうんですよ。いまだに自分も見慣れないものに対する壁をもっているんですよ。だから、そういう不安や抵抗に頭ごなしに NO とは言いたくないんです。

ただ、最近は 10 代、20 代を中心に、そうした市民活動への抵抗がなくなりつつあるようにも感じています。

## 4. スクランブルエッグの活動方針

### ◆趣旨

たとえば「青森にもパートナーシップ制度を」「同性婚を」といった主張は積極的にはしていません。法律や制度ができれば、そこから認識が変わっていきますし、実現したらすごくいいと思っていますが、そのために中心になって動いていく、というふうにはなれないです。やはり、負担になってしまうという思いがあります。

スクランブルエッグのスタンスは、「パートナーシップ条例を実現させよう」というときに、賛成してくれる人を増やしたい、そのための活動をする、というものです。一口で言えば「啓発」なのですが、「自分たちがここにいる、というリアルなものを伝えたい」ということで、当初からやってきました。

そのために集まってきた人たちで交流していることが自助にもなっている、ということは、後になってからわかってきました。スタッフなんて、自分たちでわざわざ会費を払って参加して、おいしい思いなんて何もしていないのですが、やっぱり楽しいからお金を払ってでも参加している。できないと思っていたことが一つずつ実現して行って、「やれるんだ」という体験をすると、面白くなっていきますよね。

#### ◆とにかくローカルに

青森や東北の外に出ようとは思っていません。「とにかくローカルに」と思っています。「だって、みんな、ここで暮らしてんだもん」って。その感覚をなくすと「なんかスクランブルエッグじゃないな」と思います。うまく言えないですが、青森を先進的な他の地域と同じにしたいわけじゃないんですよ。

県内では、遠くまで足を運んでいます。だんだん回れなくなって、『にじたま』も郵送になってきています。行ける人間も限られているし、交通費も全部自腹で仕事を休んで行きますから。サークルから旅費を出していないんです。

1,200円という年会費は、最低限、機関紙は出せる、という計算なんです。でも、たとえば、メンタルの不調で仕事ができなくなっている方、県外に行かれて県内での活動に関われない方には、会費を任意とか免除とかにしているの、会費収入はどんどん減っています。いまは、講師で呼んでいただいたときの謝金を団体にほとんど入れて、回しています。

#### ◆マーブルやグレーのイメージ

スクランブルエッグを始めたころから、マーブルやグレーのイメージでした。当時は、クローゼットな世界とリアルな表の世界がすばっと分かれている感じだったので、そこを橋渡しできるような中間地点になろうと思ったんですよ。ここからクローゼットの世界、たとえばオフ会にも行けるし、逆に、何かやりたいという人がオフ会から外に向かっていくこともできる。行き来できる場所にしたいと思ってきた。団体のカラーや主張が強すぎると通過できなくなってしまいます。

間口を広くしておきたいんですね。スクランブルエッグで止まってもいいし、行き過ぎてしまってもいい。情報がなかった時代に、生き方や選択肢を増やすための場所だと思ってやってきました。

#### ◆メンバーの募り方

県内の郡部から活動場所にまで出てくる会員もたくさんいます。活動に参加できるなら、どこに住んでいてもメンバーになれます。ただし一度、イベントに来てもらって、どういう感じでやっているのかを見てもらってから、メンバーになってもらっています。以前「もっと積極的にやりたい」という方や、Twitterで攻撃的な発言をした方もいましたが、そうするとサークルのカラーが変わってしまうので、今はオープンにはメンバー募集をしていません。興味がある人には「まずは実際に来てみてください」と伝えています。

スクランブルエッグは、外に向けた発信はしますが、メンバーのみに向けた活動はあまり



ないですし、ただ単にメンバーを増やすことにはメリットを感じません。趣旨に賛同する有志で活動したいという思いもあり、現在は積極的にはメンバーを募集していません。

#### ◆意志決定の方法

スクランブルエッグは合議制をとっています。議決権があるのは、年会費 1,200 円を払っているスタッフだけです。サポーターには会費はありませんが、議決権也没有ありません。

たとえば、メディアからの出演依頼、講演依頼、イベント協賛の依頼が来ると、意見がある人は出してください、ということで、スタッフ全員にメールを流します。サポーターへは、「イベントがあります」「作業があるので手伝ってください」「こういう調査に協力してください」「自分ができる範囲で参加してください」と案内を出しています。

何かをやる、やらないということを私一人で決めることは、基本的にはないですね。自分としては「これはやりたいな」と思っても、みんながやらないと言ったらやらない。もちろん、「こういう理由でやりたい」「こういう背景だよ」「これならできると思うけど、どう？」というふうに、やれる方向で説得を試みますけど。スタッフからは「それならいいと思う」とか「ここをもうちょっとこうしてくれるんだったらいい」「自分は協力できないけど、やれる人がいるならどうぞ」といった返事が来ます。

スタッフの中にさらに運営部があり、細かいことはそこで話し合っています。何らかの役目を背負っているスタッフで、今は 5 人います。運営部には、県内在住でない人もいますが、青森を出て行ったとしても、こちらで生まれ育っていると「それはちょっと青森でやるのは厳しいかもしれない」というのを肌でわかるので、相談に乗ってもらっています。

「ソウさん、ちょっとやりすぎだよ」「ストップ、ストップ」と言われるときもあります。最近では、「青森だからやれない」というよりも、「やれたらいいけど、それをやれるメンバーがいないよ、無理じゃない？」と。「クローゼットのメンバーさんが多いから、協力できない人のほうが多いんじゃないか」ということもあるし、「うちの役割ではないのでは？」「サークルのカラーに合っていないんじゃないか？」ということも、たまにあります。自分が広げたがるのを「踏み込みすぎ」と止められたりもします。

今は、スタッフが 17 人、サポーターが 33 人、合わせて 50 人です。メンバー全員を把握しているのは、私ですね。通称名の名簿はありますが、事務的にもっているだけで、メンバーには回していません。でも、幽霊部員が多いです。時々「継続しますか」と確認しています。

青森を離れても参加しているメンバーは多いですね。スタッフまでやった人たちは大体何かしらの形では残っています。スタッフは続けられないけれど、サポーターで参加するとか。県外に出ていく人はたくさんいます。出る方が多いんじゃないですかね。大学から青森に来ていたという人は、みんな流出してしまいます。この間、書き出してみたのですが、いまはメンバーの 3 分の 1 ぐらいは県外です。大学を卒業したり、地元就職したけれど転職したり、治療がしたかったり、いろいろな理由で県外に出ていきます。パートナーも青森ではなかなか見つからないですね。

#### ◆大学生の存在

大学生の存在は大きかったですし、いまだに大きいです。平日でも動けて、活動の際に来られる確率が高いし、エネルギーもありますね。面白いことを面白がってくれる。

自分たちぐらいの年代って、管理職になっていたりして参加が難しいし、「夜勤明けなんだけど」と疲れ切った顔で来てしまう。でも、大学生はパワーがあるし、柔軟だし、オープンになってきているので、「クローゼットだと参加しづらいイベントなんだけど、どう？」と誘っても「大丈夫ですよ」と来てくれたりします。ただ、卒業するとほとんどが県外へ流出してしまう……。

地元出身の大学生の参加率は低いです。やっぱり地元より県外のほうが楽みたいですね。でも、大学ではカミングアウトしやすい雰囲気になってきているようです。学生同士であれば、以前よりは話しやすくなってきていて、だから、アウトティングも起きたりしているみたいですけどね。「すごく重要なことなんだ」「カミングアウトなんだ」ということが相手に伝わらない。「私に言ってくれたから、〇〇にも言っていると思った」「共通の友達には言っているんだろう」という感じで、悪気がなく言ってしまうアウトティングです。

ただ、大学を出ると完全な縦社会なので、職場でいろいろと言われて病んでしまって、こちらで仕事ができなくなるケースもあります。

#### ◆行政との関わり

行政との関わりは、これまでのところはほとんどが講演ですね。たとえば、個人が何かの委員になる、ということなら可能だとは思いますが、団体として直接働きかけをしたり、事業の受託をするようなことはないです。なにしろメンバーにも「関わるときだけ関わってください」というサークルなので、継続的にしなければいけないこと、義務が生じることはやらないと決めています。相談事業もしていません。自分たちも相談したいときがあるくらいですし……。

それから、一応、青森県全体が対象というイメージで活動しているので、どこか1カ所の市町村だけに力を入れる、というのもできればあまりやりたくない、と思っています。ただ最近では、取り組みの必要性を感じて問い合わせくださる自治体の方もいるので、そうした動きにはなるべくお応えしたいという気持ちはあります。

## 5. 周囲の反応

#### ◆家族

両親にカミングアウトしたのは25歳の時。首都圏にいた頃です。母には、帰省したときに面と向かって「実は彼女がいるんだ」と伝えました。「え？」と言われましたが、私は10代、20代で3回自殺未遂をしているので「でもこれで納得したでしょ？」と言ったら「ああ、そうか」と。それからの母は「起きたことや目の前のことを受け入れる努力をします」というスタンスです。父のほうは、メールでカミングアウトしたら「何となくわかっていた」と返事がありました。

活動のことも話してあります。両親は、とくに関心も示さず、応援もせず、止めもしないです。カルチャロードに参加したとき、実家の庭を使ってテントの組み立てのリハーサルをしたので、その時点で話してありましたし、多少は顔を出して活動するので何かトラブルがあってはいけないと考え、それ以前から活動については話していたと思います。何だかんだで、メンバーの話をすると「バイクで来てたあの子ね」と答えたりもするので、気にしてくれてはいるのかもしれませんが。

#### ◆地域

カルチャロードや映画祭、ラジオなど、少しずつ表に出始めた頃に、「みんな、あんまり見ていないよね」「よっぽど関心がなかったら、見つからないや」ということに気が付きました。さすがにテレビに出たら、父親の行きつけのスナックのママから「出ていたでしょう?」「見たよ」と言われましたが、NHKは、自分の親世代がけっこう見えていますから。

当時は、同性愛だと受け入れられにくかったのですが、「性同一性障害です」と言っしまえば、「ああ、そっか、大変だったんだね」で終わる。非常にもやっとする話ですが、それで話を聞いてもらいやすくなる。同性愛というよりも、性同一性障害と言ったほうが聞いてくれやすい空気がありました。

2011年ぐらいだったか、市民活動団体の報告会で「実は自分は元女子です」と昔の写真を見せたことがあったのですが、その後で、他の参加者の方から、「あんた、性同一性障害でよかったよ」「ホモだったらどうすべと思った」と言われました。ひどい話なんですけど、ご年配の方も多いので古い情報からの誤解も多く、いまだにそういう空気があるかもしれません。

#### ◆治療

ホルモン治療は、震災前から始めていました。弘前の大学病院で診断書をもらい、地元の産婦人科で注射をしていました。

20代前半の頃にカミングアウトした友人から反対された体験もあって「体をいじるのはやめておいたほうがいいのかな」と思っていたのですが、治療を進めていく知り合いのFTMさんとの差があり過ぎて、悔しくて泣いてしまったことがあったんです。そのときパートナーが「そんなに悔しい思いをするんだったら治療してもいいんだよ」と背中を押してくれました。

5年間はホルモン治療だけで、見た目と書類の性別が一致しない状態で生活していました。そんな中、パートナーが職場でモラハラに遭ってしまい、体調不良で退職の手続きにも行けなくなってしまいました。でも、自分が代わりに手続きに行くわけにもいかない。親戚につながっている人も勤めていて、名乗ればばれてしまうし、婚約者とも言えない。結局、手続きはパートナーの母親が来てやってくれたのですが、そのことがきっかけになって、手術をして、戸籍の性別変更をしました。配偶者という、公的に認められる通行手形がほしい、という理由でした。

## 6. 震災の影響

東日本大震災のとき、スクランブルエッグにも首都圏から何件か連絡や問い合わせが来たんです。「みんな無事?」「心配でしょ?」「何か必要なものはない?」とか、「これから東北に向かうので、何が必要か、話を聞かせてほしい」とか。

でも、全部、断ったんです。サークルのメンバーには被災した人もいましたが、「もし避難しているとすれば、地域コミュニティの中にいるから、自分は逆に連絡を取れない。アウトティングになってしまう可能性があるから」「それに、市民活動につながっていない当事者のほうが多いので、性的マイノリティみんながどういう状況にいるかなんてわかりません。だから何もお話できません」って。性的マイノリティだけじゃない、各自が各地で生きるのが精いっぱい状況下での問い合わせに、正直腹が立ちました。日常生活を回そうと頑張っているときに、被災県にいただけで被災者扱いされることも、まとめ役のような扱いをされることもとても嫌でした。岩手の会議<sup>2</sup>のときに初めて話しましたが、それまでは震災の話は一切しないようにしていたんです。

ただ、いざ被災したら、その地域はみんな被災してしまうわけですから、離れている団体とつながっていないと何もできないじゃないですか。だから、あの会議がひとつのきっかけとなって、東北の他の団体さんとつながるのはいいな、と思うようになっていきました。

スクランブルエッグはそれまで、他の団体とのつながりがあまりなかったんです。映画祭との交流や ESTO さんの研修参加があったくらいで。ところが、震災で東北に、とくに宮城県にいろいろな団体ができて、「何だかカラーが似ているな」「仲良くなれそうだな」と思える団体も出てきた。「行ってみよう」と思えるような、自分たちの琴線に触れる面白いイベントも増えてきたんです。

## 7. 仕事と活動

### ◆仕事への影響

地元で活動するのはハードルが高かったのですが、でも5年ぐらい関東のほうにいたので、いつでも逃げられると思っていました。サークルを始めたときも「最悪、弘前から逃げればいいや」という気持ちでした。

クローゼットのメンバーたちを表に出さないように、団体登録は自分の名前でしましたし、取材や出演も自分が受けていました。他に受けたい人がいれば別ですけどね。そういうふうになってきたので、最初の頃は「スクランブルエッグって他にメンバーいるの?」と見えていたと思います。

でも、うっかり地元で自営業を始めてしまって、動けなくなってしまいました。この地域で家庭を築いて、ここに馴染んで、自分の足場を作っている。今はもう、他の土地に

<sup>2</sup> 岩手の会議：「セクシュアルマイノリティ支援第2回全国会議 in 盛岡」2013年10月26日（土）、マリオス盛岡地域交流センターにて。パネルディスカッション『『緊急時の孤立を防ぐコミュニティづくり』』に登壇。

行くという選択肢がないんですよね、よっぽどのことがなければ。

仕事への影響はありますね。同業者から共通のお客さんに「あそこの人、元女なんですよ。知っていました？」とばらされていた、ということがありました。実は、自分から、このお客さんなら大丈夫かなと思ってカミングアウトしたんですけど、「いや実は、1年ぐらい前に、わざわざ教えてくれた他の業者さんがいて、知っていた」と言われたんです。「でも、それは仕事には関係ないから」とおっしゃっていました。いいお客さんで良かったのですが、他のお客さんにもアウティングしていると思ったら、怖いですよ。

仕事の関係者から脅迫めいたことを言われたこともあります。そういうことがあると、仕事関係の集まりに行きづらくなることもあります。それでも、カミングアウトしても変わらず付き合ってくださいる先輩方もいて、その方たちにはセクシュアリティ関係なく良くしていただいています。

#### ◆地元紙には顔も名前を出せない

開業をするまでは、「関心のある人しか見ていないから、顔を出して活動してもみんな気づかないだろう」と思っていたのですが、今は、地元紙には顔も名前も出さないようにしています。『東奥日報』という青森でシェアの高い地元紙から取材を2回ほど受けたのですが、顔も名前も出せないと聞いたら、記事にならなかったです。

しかも、うちのサークル、ちょっと取り上げにくいんです。訴えたいことがあまりなくて、ただ「ここにいるよ」という感じなので。「何に困ってる?」「何を伝えたい?」と聞かれると困るんですよ。「こういう差別にあった」という具体例をそれほど持っていない。もちろん、細かいことはあるのですが、でもそれを言いたくて活動しているんじゃないんですよ。マスコミで取り上げられているのがそういう部分ばかりで、それもまた、自分たちにはしっくりこない。だから「困っていることを伝えたいのではない」と言うと、「記事にするのは難しいですね」となってしまいます。

困らなくて済むようにしたい、そのために対等になりたい。そういうことなんだろうと思います。なかなかそれをうまく伝えられません。

## 8. 地域での活動

#### ◆県内の差

県内でも地域によって受容的な態度というか、雰囲気には差があるように思います。きっとどこでもそうだと思うんですけど。ある町は仲間意識が強かったり、目上の人や男性の意見を尊重するような社会でより閉鎖的に感じられたり。別な町ではいい意味で事務的で、平等に扱われていると感じたり。また別な町では比較のおおらかで、誰にでも話しかけやすい雰囲気があったり。講演でも、会場からのリアクションがいい地域と、しーんと真面目に聞く地域とがあったりします。一面を見ているだけなので、私の主観でしかないんですけどね。

#### ◆クローゼットの度合い

何かのときに顔を出してもいいよ、と言っているメンバーは、2,3人しかいないです。県内出身だったり、県内で仕事をしていたりすると、表に出るのは抵抗があるでしょうね。その人の経験にもよりますが、家族がいたり、就職した先が閉鎖的でとても言えないような状態だと、どんどんクローゼットになっていく。逆に、風通しがよい職場だと、少しオープンになったりして、環境にもだいぶ左右されます。

これから地元にも理解のある企業が出てくるかもしれないですが、多くの人は、そもそも理解がありそうかどうかで就職先を選んでないのではないかと。内定がとれるかとか、仕事内容や給与水準とかで判断していると思います。

私自身、再びクローゼットの度合いが高まって、自分の生活している地域に近いところの講演やイベントに呼ばれたときは、「顔も名前も出せないけどいいですか」と相談することがあります。県内でも離れていれば、本名でも大丈夫かなと思うこともありますが、自分の名字は地元では珍しくて、この名字はほとんどが親戚なんですよ。だから、地元に近いところでお話するときは、本名は出さないようにしています。

#### ◆警戒心を解くために

他の土地では活動をやっていなかったの、これが弘前に特有なのかどうかはわからないところもありますが、ただ、東京から帰ってきたとき、すごく閉鎖的な雰囲気を感じたんですよね。だから、寂しくて、友達が欲しくなったんです。「自分とはちょっと違うぞ」というものに身構えてしまう。遠巻きに見る。この警戒をどうにかして解かないと何も始まりません。

講座のとき、警戒心がある方に何の話からすればいいだろう、ということはずごく考えます。最近、全然関係ない話を入れたほうがいいのかと思って、普段の自分について話しています。「家庭菜園が趣味です」「旅行が好きです」とか、「会社員です」「争いごとが苦手です」とか、皆さんが知っているような身近な人になってからスタートする。

知識や正論ではなく、相手の警戒している気持ちを受け止めないと、心を開いてくれません。「初めて聞くからちょっとよく分かんないですよ」「カタカナが多すぎて分かりづらいですよ」と受け止める。あるいは「トイレに入る時って、何も考えないでこっちに入りますよね」といった話をして、その人の生活の中に落とし込んだりします。自分だったら、どんな風に話してもらったら聞きやすいか、というのを考えます。

「自分にも保守的な部分があることを話したほうが身近に感じてもらえるのかな」といったことも考えたりします。たとえば、私は自分のことを100パーセント男性とと思っているタイプではないので、スーツはあまり着ないんですよ。肩も凝りますし。でも「スーツを着ていったほうが場に合ってるかな」というときには、着て行きます。自分がどうしたいかより、空気を読んでしまいますね。「自分は確かにセクシュアリティに関してはマイノリティだけれども、それ以外の部分は青森のマジョリティの人たちと近い」「共通点がある」ということで、身近に感じてもらえることもあるのかなと。これは、テーブルについてもらうきっかけを作るためにどうするかという話で、知識の正しさという話ではないんです。いっ

たん対話できる雰囲気や人間関係をつくってから、どこかのタイミングで「こういうときはこういうふうに言ってもらったほうが嬉しい」と伝えています。

講演では「困っていること」を話してほしいと言われることも多いのですが、困っていることの根本にあるものに目を向けてほしいと感じます。最近よく話しているのは、フリースクールを見学させていただいたときのことです。ある方から「息子が“僕は僕でいいんだね”と言った。それからご飯を食べられるようになった」という話を聞いて、そのとき初めて「自分に足りなかったのはそれだ」と気づきました。30代後半になってようやく「10代、20代前半ぐらいまで、自分が自分でいいと思えなかった。それで今こんな苦勞しているんだな」と腑に落ちました。それで、最近は講演の最後にこの話をしています。誰でもそうだと思いますが、自分が自分でないと楽しいことも楽しくないし、居場所は居場所にならないし、夢は夢にならないから、という話です。

#### ◆「たたかれるのが怖い」でもいいじゃん

講座では、フロアからの質問はあまり出ません。でも、用紙を配って「聞きたいことがあったら書いてください」と言って集めると、いっぱい来ます。自分が発言しているのが見えるのが怖い。自分の発言がどう思われるんだろう、と怖いのかもかもしれません。

スクランブルエッグでも、私からのメールへの返信は、全員が見ているところには返信されない設定にしています。返信は、運営に関わっている役員しか読みません。そうしないと、他のメンバーの意見が気になってしまって、みんな黙っちゃうんじゃないかなと。

うちは「啓発をするけど目立たない」「たたかれないようにやろう」というサークルなので、そのあたりのことを運営の会議で相談しています。効果としてはゆっくりかもしれないですが、最初から鈍行で行くと決めて、いちばん後ろを走るイメージでやってきました。それでも乗りたい、だから乗りたいという人が乗れるようにしています。

てんでん宮城さんと動画を作ったときに話していたことなのですが、活動をしていると、覚悟や犠牲を求められたり、LGBTであることを求められたりする。でも、それってクローゼットだったときに、シスジェンダーの異性愛者のふりをしなければいけなかったのと変わらないのではないかと。「結局、何者かにならなきゃいけない」「それはおかしい」「そうでなくても生きていいじゃん」「今しんどいけど、何とかやってるぜ、ということだって大事じゃん」「怖いと思ったっていいじゃん」「怖いのだって自分じゃん」と。そこまでハードルを下げた活動しています。そうでないと、自分がやれないので。

#### ◆LGBT 向けの店

県内にも何軒もあるはずですが、青森市にあるし、八戸、弘前にもあります。でも、お店との交流は、私にはあまりないです。単純に、私自身がバーのようなお店に滅多にいかないので落ち着かなくて……。お店やお客さんによっては、市民活動に抵抗があったりすることもあるだろうと思っています。「かわいそうな人にされたくない」とか「自分たちを食べ物にしているんじゃないか」「消費されている」といった思い、一部分を取り上げられることにアレルギーをもっている人たちがいることは、SNSでもよく見かけます。実際に消費され

たこともあったんだろうな、と思います。

いまでも、マスコミの取り上げ方を見ていると、消費されている気持ちになるときはありますけどね。「同性婚の訴訟をやっているけれど、どう思いますか」という問い合わせなんかも来ますが、コメントがほしいだけなのかなとか。ピンポイントで話題になるところだけを削り取られていくような感じがします。そうでなくて、一人の人間としてまると存在を受け止めてほしいと思っています。

#### ◆他分野の団体とのつながり

引きこもり、不登校の支援をしている団体とのつながりができました。4、5年前だと思うのですが、弘前で子ども・若者育成支援のフォーラムに行ったとき、不登校の子どもの訪問支援をやっている方にご挨拶をしたんです。

そうしたら翌年になってから「うちの取り組みの中でLBGTのことを知ってもらいたいと思ったら、研修のときに1コマもってもらうぐらいしか思い付かなくて」とコマを用意してくださって。それから毎年、訪問支援をやっているサポーターさんの養成研修のときに、2時間びっちりお話しさせてもらっています。年の近いお兄さん、お姉さんが訪問するのが基本らしく、研修の受講者は大学生メインです。受講者が「実は友達からカミングアウトされたけど、ちゃんとわかっていないところもあるし、他の人の話を聞きたいから、交流会に行きたい」と連絡をくれるケースも出てきました。

ヒューマンライブラリーも広がりができてきました。最初はサークルで企画してやってみたのですが、それだと性的マイノリティのテーマしか扱えないので、大学の先生にお願いしたり、他の団体さんと一緒にやらせてもらっています。方向性としては、他のマイノリティと同じように扱われる、たくさんある「本」のうちの1つというふうに扱われるほうがしっくりきます。ヒューマンライブラリーは、メンバー全員が賛成しているわけではないので、有志が話しに行っています。

## 9. 変化

#### ◆代表を退く（2018年7月）

実は急遽、代表を辞めることになりました。何年か前から、ある団体の方に会うと冷や汗をかいたり、パニックになってしまったりして、代表としていろいろな場所に行くのがしんどくなってきました。

精神科で「原因になっていることを避けられるのであれば、まずはそうしてみても、様子を見ましようか」という話になったので、メンバーに事情を説明して、2018年7月に代表を降りました。新年度に新しい代表が決まるまで、代表は不在でした。

当事者同士のほうが遠慮がなかったり、お互い期待してしまう部分もあったり、かえってこじれることがあるのかもしれない。誰にでも相性はありますし、価値観が合わないこともある。うちは本当に地味にやっていますが、ここがいいという人もいれば、合わないという人もいます。無理に全部がつながらなくても、様々なやり方や選択肢がある、ということ



いいと思っています。

◆新代表が決まる（2019年5月）

もともと代表と言っても、顔や名前を出す係、よそから入ってくる情報をメンバーがわかりやすいようにして配るフィルターの係だと自分では思っていました。そろそろ辞めようとは思っていたんです。いつまでも同じ人間が代表をやるべきではない。時代も変わっていくし、実際はそうでないのに「あそこってソウさんしかいないじゃん」と思われてしまう。自分の役割を担ってくれる次世代がいるのであれば、交代したほうがいいとずっと思っていました。

それで、今期から10個下のメンバーが新しい代表に就任しました（2019年5月、新代表のインタビューを本冊子に掲載）。初期の頃から大学生として入ってくれていたメンバーが、「まだこのサークルはあったほうがいいと思っているから、自分がやれることはやります」と言ってくれました。「代表でもクローゼットでいい」「つらくなったらいつでも辞めていい」と伝えていますが、役職につくとみんな責任感をもってやってくれます。

◆社会の変化で外向けの活動がしづらくなってきた

周りの変化で、外に向けての活動がしづらくなってきた、ということもあります。最近では「ニュースで見たよ」と言われて知らなかったことが結構あります。活動をやっているからといって、全ての情報を見ているわけではないし、見ることでつらくならないようにシャットダウンしているときもあるのですが、それを周りが持ち込んで来てしまって、もうお腹いっぱい。外からの働きかけも増えていますが、期待に応えるのもつらくなってきました。

「LGBT」が知られていくほど、自分たちはそこから乖離していきます。「LGBTの人」である前に、私は私なんですよね。自分たちは最初からずっと「自分たちはこんなもんですよ」という感じでやってきましたが、今は周りのイメージが多層化してしまっただけで「おかしい人たち」と思っている人もいれば、「すごく大変な人たちなんだ、何か手助けしなきゃ」と思っている人もいます。それら全部に対応できない。一時期は、基礎的なことを知りたいけれど情報がない、という人に向けて講座をやったりしたのですが、「今はそれも要らなくなってきたんじゃない？」という話になって。「自分たちができるのは、もっと自分たち自身の生き方、人間を見てもらうことじゃないか」と思い、ヒューマンライブラリーに関わったりしましたが、ちょっと方向を変えようよ、ということになりました。

メンバーは増えているのですが、県外に行ってしまった人も多いので、イベントのための作業の参加率が下がっている、ということもあります。それで、少人数でやれるもので、なおかつ、今これがあったらいいね、というものを探して、「にじたま会」という交流会を始めることにしました。

◆にじたま会を始める（2018年6月23日にプレ企画）

これまでも何回か単発で交流会をやっていたんですけど、いまいち自分がイメージしている交流会にならなくて。「わーっ」というノリで全てを乗り切っちゃうような、オフ会の

ような雰囲気になってしまう。もうちょっとゆっくり会話ができ、「何者でなくても、いいよ」という、ゆるいものをやりたい。話を聞くだけでもいい、人見知りの人でもリラックスして参加できるものにしたいと思っています。

人数が集まってしまうと、わーっという方向で流れてしまうので、定員を設けてみたり、場所も変えてみたり、内容も変えてみたり、いろいろと模索中です。定員を設けたのは、人数が多過ぎると、話ができない人がいたり、こちらも行き届かなかったり、フォローを入れられなかったりするからです。

代表が変わるので、あまり表に出なくてもいい活動に転換した、ということもあります。また、当事者の親御さんから、時々相談が来るので、親御さんでも安心して一緒に来られるようなもの、親が子どもに行ってきたもいいよと言える、あるいは、学校の先生がこういうのがあるみたいだよと言えるものが必要かな、と考えています。イベントだどうしても外に見えてしまうので、もう少し隠れた場所でやれるようなものを作ってみようか、ということです。ですから、プライバシーに気をつけて、開催場所は参加者にのみ知らせる形です。

まだ、定期的には開催できていません。去年（2018年）は2回だけです。今年（2019年）は、5月にお花見とドッキングさせて「出張にじたま会」をやりました。6月はメッセージ展の展示作りを一緒にやりませんか、という内容。8月、9月、12月も予定しています。12月以降は雪が積もって道路が凍ってしまうので、春まではやらないつもりです。4月は、5月の総会でちょっと手が回らないです。ということで、1年の3分の1ぐらいいは空いてしまいます。

他にやれるメンバーがいれば、もう少し開催できるかもしれません。各所でメンバーが2人いれば足りるし、自分がいなくてもできる方向にもって行って、県内の各所で小さな集まりができればいいですね。参加者からサポーターやスタッフが出てくることも期待しています。

## 10. 今後のこと

### ◆成果

気がついたら10年経っていましたが、成果を上げたとはあまり思っていないです。世の中が変わって行って、私たちはそれに翻弄されながら、その時々身を委ねて活動していた、という感じです。

実は、いまの仕事を始めたとき、忙しいことを理由にサークル活動をあまりやらなかったんです。そうしたら人相がすごく悪くなってしまった。それが、久しぶりにメンバーさんと会ったときに、すごくほっとしたんですね。そのときに「これはもう、自分の居場所になっているんだな」と思いました。やっぱり自分のために活動しているんですね。

メンバーさんの中にも、「スクランブルエッグに参加して、やっていけると思った」とか「すごく支えになった」と感じてくれている人がいる。この間の総会では、スタッフに事前アンケートをして、「あなたにとってスクランブルエッグとは？」と聞いたんですね。今後の活動の参考にしたかったので。ほとんどが「居場所」「故郷」「家」と書いてあって、

「ああ、そうか」と思いました。スクランブルエッグに関わってくれた人にとって、何かプラスになったこともあったのかな。必要がなくなれば解散してもいいのですが、10年間やってきた、ということが説得力をもつこともありますから、今後、若手にそれを利用してもらえたらと思っています。

#### ◆課題

活動が大きくないので、人が集まらなくても何とかなるのですが、IDAHO メッセージ展の展示物を作るよ、と呼び掛けても集まらず、1人で作ったときはあります。10年経っていますから、初期の頃よりは年齢層が上がってきています。学生は県外に出てしまうし、私たちの年代は管理職になってしまっていて抜けられない。イベントのときは休みを取るけれど、準備には来られないとか、そういう感じです。今年は、サークル以外の人手を借りることにして、「にじたま会」でIDAHOの展示物を作りましたが、そうしたら定員いっぱいまで申し込みが入りました。

大学のサークルがなくなってしまったのが、少し痛いですが、ただ、授業で同性愛のことを取り上げている大学の先生とはつながっていて、機関紙を研究室に置いていただいています。そこから学生につながる可能性はありますね。

#### ◆今後

これからこれがやりたいです、というのは、サークルとしてはあまりないです。やれるうちはやって、楽しみにして来てくれる方がいるんだったら、もうちょっとやってみようか、という感じです。やれなくなったり、来る人がいなくなれば、いつでもやめます。人数が増えればいいとも思ってないですし、最終的にはサークルが必要なくなればいいと思っています。

ただ今のところ、「地元にいるよ」ということだけは、細々とでもやっていけたらと思います。IDAHOの展示はちょっとマンネリ感があるんですけど、でも、それを使って、多賀城や山形で展示企画をしてくれました。保管しているだけではもったいないので、どんどん使っていただければ嬉しいです。

青森県男女共同参画センターで1年に1回のフェスティバルがあるのですが、そこへの出展も続けていけたら、と思っています。お客さんが来なくても、サークルの名前がプログラムに載っているだけで「あそこの施設は使っても嫌がられない」ということが伝わりますから、それなりの意味はあります。

ある友人に「うちはどんなサークルだと思う？」と聞いたら、「やりたいことをやりたいときにやる団体」と言われて「確かに」と思いました。やる意味があっても、やれない、やりたくないということであれば、やらないんですよ。例えば署名運動やこちらから行政に意見を上げることは、どんなに意味があっても、そのあとのフォローが負担になるので基本的にはやりません。活動のハードルを本当に下げて、実現可能な小さな目標を設定しています。燃えつきも嫌だったんですよ。

あとは、サークルを始めるきっかけになったのが高校生の女の子だったので、どこかで

「その子が参加できるかどうか」とか「クローゼットで生きていた自分が参加できるかどうか」ということを意識しているんじゃないかな、と思います。自分が怖いことはやらない、という程度のことですけど。

市民活動をしていると、独善的な怖い人だと思われていることもあります。だから、「話しやすい」と言ってもらえると嬉しいんですよね。この間、講演に行ったときも「自然体でお話しされていたから良かった」と言ってくださった方がいたのですが、まさにそれを感じていただきたいと思っています。だって、大部分の当事者は活動をしていないし、マジョリティと同じように生きている。でも日常の中でちょっとモヤっとしたり、しんどいなと思うことを繰り返しながら生きている。そういうところに少し気持ちを寄せていただくことが、活動の目的なんです。